



Kokopo

パプアニューギニア

↙ オーストラリア (Australia)

僕のひいおじいさんの弟の話をしてよう

作者：にしだよういち

概要：ココポという可愛らしい名前の島で、私の誕生日に戦死したひいおじいさんの弟のお話です。というか、その戦死までの過程を調べた自分の話。パブーテスト用。

何気ない始まりでした

記憶はもうおぼろげですが、大学生をやっていました。
ダメ学生です。今はダメ大人ですが。

夏休みに実家に帰りまして、何を思ったのか
近所にあった、もう誰も住んでいない母方の祖母の家に行ったのです。
まあなんか金目のものでも残ってないか、とでも思ったのでしょうか。
最低のアホです。

伯父が銀河英雄伝説を好きらしく、家を出たあともその小説が残っておりまして。
私もライトノベルが大好きなものですから、それを読みまして。
そのとき押入れかどこかに、遺品があるのを見つけたのですね。

何人分かは覚えておりません。
だぶん私のひいおじいさんと、その弟さんのものだったのでしょうか。
しかし軍人&農家というその家は、他にもたくさんの軍人の遺影が飾ってあったのです。
たしかあの家は日露戦争から誰かしら従軍していたのでしょうか。

母方の祖父は太平洋戦争から生還し、
私が小さい頃まで生きていたのですが、私にはその記憶はなく。
あるのは、その祖父の葬式で庭にあったネズミ捕りの罠、そのカゴを見ていた記憶です。
私のすぐ下の弟もおりました。
たぶん幼稚園に入ってもいない？それとも入った？そんな歳。
ネズミがいたのかは覚えていません。
ただ、たしかチーズはあったのように思います。
おびき寄せるためのチーズが。

梨畑がありました。もうその畑はつぶしてしまいましたが、小さい頃に
山と積まれた梨を祖母と母が箱詰めしていた記憶があります。

そんな田舎の古びた、しかし大きな、そして誰もいない家で、
私はその遺品を見つけ、中を探り始めたのです。

それを冒涇というのでしょうか。

もうひとりの特攻

そこにあったのは昔の絵葉書と写真。
おそらく中国、満州あたりではないかと勝手に（本当に勝手です）推測した
街の写真や、南方のジャワで撮影したという記述のある写真。

中国に行ったのは生還した祖父だと聞いています。
ジャワは戦死した方の遺品。

ここまで書いて思い出した。
記憶が混乱しているが、私が書こうとしているのは
「ひいおじいさん」の話であって、
「ひいおじいさんの弟」は沖縄に特攻した一式陸攻の乗員ではなかったか。

どちらかが義烈空挺団と呼ばれる、沖縄の北谷の米軍の占領地に特攻した部隊の人なのだ。
義烈、は飛行機で戦艦に突撃するのではない。
敵の飛行場に強行着陸をはかり、奇襲する特攻隊なのだ。
よく覚えていないが、数十機か10数機かで出撃し、1機だけが占領下の飛行場に着陸し、
そして1人だけが敵地を突破して、まだ玉砕していなかった日本軍と合流したのだ。
もちろん、その時期は沖縄で日本軍が玉砕するほんの少し前でしかなかったのだが。

この兄弟は、どちらもあまりにも過酷な戦場で亡くなった。
どちらも戦争末期に。

戦死概況報告書

もはやよく覚えていないが、
そこには手書きのぼろぼろの紙があり、
たしか「戦死概況報告書」といった文字があった。
とても読みづらかった。
筆で書かれたような、達筆とも違う。
たぶん戦場で書かれ、あわただしいなかで、たくさんの死のなかで
書かれたのだろう。

ひいおじいさんか、ひいおじいさんの弟か、
ともかくココボという場所で亡くなった、その人の死の様子が
状況が書かれていた。

簡単なことではあった。
敵機の機銃掃射を受けて、その破片かなにかが突き刺さり
その傷がもとで数日で亡くなったのだ。

戦死の日は●月×日となっており、それは私の誕生日だった。

外は一気に天候が悪くなり、薄暗く、雷が聞こえた。
夏の夕立なんて珍しくもない。

だが私はゾットした。
その奇妙な一致に。

東北の兵団

たしか第二師団だったか、何連隊だったか。
仙台の宮城野公園だったかと思いますが、そこにその連隊の資料館がありました。

ともかく招集されたのか志願したのか、それとも職業軍人として
もともと隊にいたのか。

ともかく南方へ送られました。

ガダルカナル島へ。

飢餓の島、餓島。

あの戦争の悲惨な戦場として必ず名前のがる島。

ここで死んでいった兵隊のなかに東北の人々がたくさんいるのです。

だから作戦を考案した参謀の辻正信を恨む人が多い、という話も後から調べてわかりましたが
。

ガダルカナルから生還できた、その人は、しかし運の良さをいかすことはできず
ラバウルですら制空権が失われたニューブリテンで、最期をむかえるのです。

水木さんのように戦後を目にすることなく。

図書館通い

憑かれたのかもしれませんが、その夏はただその人の死の過程を探るだけでした。
夏休みはすべてそれにあてました。

ひたすら戦争と戦場と人の死を追う。
なにをやっているのか、と。
自分でもわからず。

図書館にただひたすら通う。
戦史を戦記をただひたすら読む。
そしてまとめる。

少しずつ、部隊がどう移動したかがわかる。
この部隊の歴史がわかる。

鹿児島へ

私は2人の死を追ってもいたのです。
一人は義烈の、一人はココポの。
ひとは沖縄に特攻しておそらく撃墜されて死に、ひとはガ島を生き延びたのに戦死した。

金もないのに鹿児島へ飛んだ。
知覧の特攻隊の資料館を見たかったのだ。
そこに、その人の写真もあった。
若くて、とても凛々しい。
私にはとても出せない顔だった。

私のひいおじいさんか、その弟である。
おじいさんではない。
若い、というのはいくつぐらいなのか。
私にはその人がせいぜい20代前半に思えた。

いまの私よりも若く、大学生だった私はたしか
歳の近さに驚いていたはずだ。

館内にはお年寄りが多かった。
雰囲気は想像以上に暗くなく、むしろ暗いのは私のようなやたら
思いつめた若者のほうだった。

お年寄りが元気よく周りとしゃべりながら写真や名前を見て、
あった、あったと。
それは友達や家族を見つけたときなのだ。
そうなのだ。
ここには写真が残っている。

元気がよいことはなにも不謹慎でもなんでもない。
かつて共に過ごした人たちに会いにくるのに暗くなる必要なんてない。

私の変な思い詰め方こそ、戦争を知らないことの証明だった。

遺骨や戦地の調査をしている人々のURL

本をあらかじめ読みつくした私は
次にウェブ検索に移った。

今「ココポ」で検索するとずいぶん情報が出てくる。
というより探し方の問題もあるのかもしれないが。

ココポという戦場について詳しい話が載っているウェブページは
なかなか見つけずらかったように思う。

しかし実際に現地で調査をしている学者さんのレポートなどは
とてもためになったような記憶がある。

もう無理だった

私はひたすら調べた人のことを
つれづれと、ほとんど誰にもどうでもいいものを
小論文のようにしてまとめた。

私は学内の論文大会にてきとうに送り、
なぜか興味をもたれて、賞をもらってしまった。

そのころにはもう私は人としゃべるのが嫌になり、
電話にも出なくなり、ひきこもっていた。
髪はぼうぼうであり、授賞式には出なかった。

賞金があるという。
私は暗い目で、意地汚い気持ちでその金だけを
受け取りに大学へ行った。

人の死を文章にまとめて、金を受け取ったのだった。
私は自分の醜さに暗いおかしさを覚えた。

すべて忘れることにした。

忘れたのに今思い出しこれを書いている。
パブーを使って何を書くか、おためしになにを書くか。
そこでこの題材を選んだ。

さくっと2ページくらいでやめればいいのに。
止まらなくなった。
いつか、もっときちんと書くときがくるのかもしれない。
ココポに足を運ぶこともあるかもしれない。

それとも、呼ばれているのかもしれない。
やっぱりゾツとした。